

東北地方における女子ソフトボールチームの現状

－合同チームの効果と課題－

吹越 のりみ（弘前大学）

1. 目的

本研究の目的は、少子化により部員不足が加速する東北地方の高校ソフトボールの現状を調査するとともに、合同チームが競技人口を保持する効果と今後の課題を探ることである。

2. 研究方法

- 1) 対象：2013年から2022年までの高総体夏季大会秋季大会の試合結果
- 2) 調査方法：各大会の参加チーム数、合同チームの数と割合、参加校数を調査した。
(チームA、B(2校合同)、C(3校合同)の場合、チーム数は3チーム、参加校数は6校となる。)
- 3) 分析方法：チーム数減少の要因を人口減少、合同チーム数、編成の3点で分析した。
また、合同チームが許可されない場合のチーム数についても比較分析した。

3. 結果と考察

1) チーム数減少とその要因

1点目の要因は人口減少だと考えられる。県ごとに比較すると青森県、岩手県、福島県の減少率が高く、当該地域の人口減少とチーム減少間に有意差($p \geq 0.05$)が認められた。2点目の要因としては合同チームの編成状況である。減少率の大きい3県は、合同チームを結成せずに出場を辞退する学校が減少率を上げている要因となっていた。3点目は合同チームの編成である。東北地方では最大5校で編成されたがチームがあるが、3校以上で編成されたチームが年々増加している。

2) 合同チームの効果

図1は、合同チーム許可の有無によるチーム数の比較を示している。コロナ禍以降、特に合

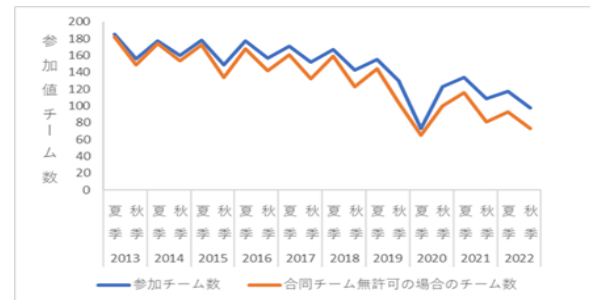


図1 合同チームの有無によるチーム数比較

同チームの占める割合が高まる傾向がみられるが、なお全体の参加チーム数の減少傾向は加速する傾向にあり合同チームの効果は限定的なものであった。また、各県の参加校数の推移を調べると、合同チームの割合が大きい4県は、チーム数に比べて減少の仕方が緩やかであった。

3) 合同チームの課題

課題として、チームの継続期間の短さと勝率が挙げられる。継続期間については、平均継続期間1.36大会で、ほとんどの合同チームは1大会で解散或は編成変更をしていた。勝率については、独立チームの平均勝率が36.11%に対し、合同チームは17.76%と合同チームの勝率が低い。その中で、岩手県の2校合同チームは準優勝をしたケースがあった。学校ごとに競技力を高めれば合同チームになっても勝率を挙げられることは可能と考えられた。

4. 結論

本研究では、チーム数が減少しているが合同チームを編成することで部の活動を維持できていることが明らかになった。合同チームを活用し、競技人口を保つためには、計画的なチーム編成と、少人数でレベルアップを測ることができる練習内容の工夫が必要であると考えられる。